

## 黙示録15章「極まる神の憤り」

### 1A 打ち勝った人々の歌 1-4

#### 1B 最後の七つの災害 1

#### 2B モーセと子羊の歌 2-4

### 2A 聖所からの御使い 5-8

#### 1B 清い光り輝く姿 5-6

#### 2B 栄光の煙 7-8

## 本文

黙示録 15 章を開いてください。私たちは、14 章で主がこれから、裁きを行われることを、御使いを通して宣言されました。第一の御使いが永遠の福音を、第二が、バビロンの倒壊を、第三が、獣の国の住民に対する永遠の苦しみを宣言しました。そして、キリストが地上に再臨される時、収穫のようにして国々をまとめあげ、裁かれる幻を見ました。これらは宣言ですが、15 章から、最後の災害が実行される場所を見ていきます。15 章と 16 章は一つになっています。15 章は、天においてのこと、16 章は、この天から地上に降る災害を見ることとなります。

### 1A 打ち勝った人々の歌 1-4

#### 1B 最後の七つの災害 1

<sup>1</sup> また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。ここに神の憤りは極まるのである。

「もう一つの大きな驚くべきしるし」です。12 章に巨大な驚くべき徴として、ヨハネは、太陽と十二の星を着ていた女を見ました。また、七つの頭と十本の角を持つ赤い竜も見ました。そして、ここでもう一つの巨大な驚くべきしるしです。

それが、「七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。」ということでもあります。これまで私たちは神と子羊から来る災いを見てきました。七つの封印が解かれるところから始まり、第七の封印が解かれたら、七つのラッパが鳴りました。

そして、第七のラッパが鳴りましたその時のことを思い出してください、11 章 15 節からです。天において大きな声々が聞こえて、この世の国が私たちの主、およびそのキリストのものとなったと叫びました。そして、二十四人の長老が神の怒りの日が来たと、神を礼拝しつつ言っています。それから 11 章 19 節にこうあります。「それから、天にある神の神殿が開かれ、神の契約の箱が神殿の中に見えた。すると稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。」こ

こに 15 章がつながります。神殿が開かれて、契約の箱までが見えているのですが、15 章 5 節以降に、聖所から出て来る七人の御使いの姿があります。そして彼らが、一人一人、神の怒りの極みである鉢を投げつけます。

つまり 12 章から 14 章までは、第七のラツパが吹き鳴らされて、最後の七つの災害が地上に下るに当たって、大患難において起こる出来事を挿入しているということです。災いを下す幻から少し離れて、獣が地上に現れて、国を造るという出来事を示さねばなりません。覚えていますか、大きな強い御使いがヨハネに対して、開かれた巻き物を食べさせて、もう一度、預言しなければいけないといいましたね(10:11)。主が預言者たちに語っておられたことが、まだまだたくさんあったのです。それで 12 章から 14 章までに、主はヨハネに数々の幻をお見せになりました。

そして、この最後の七つの災害によって、「神の憤りは極まる」とあります。ここの「極まる」はギリシヤ語で「テレオウ τελέω」です。イエス様が十字架に付けられて死なれる直前の発せられた言葉、「完了した(ヨハネ 19:30)」はテテレスタイであります。主が、十字架の上で贖いを完了されました。救いに御業は十字架で完了したのですが、同じように、神が地上に対する裁きを完了してください。主は、どんな罪も、人の子を冒瀆する罪でさえ赦されると言われていました。私たちが、この罪だけは赦されないとと言われても、主は赦されます。贖いは完全なものだからです。神の、罪に対する御怒りはそこで満たされました。

しかし、もしその宥めの供え物を拒んだらどうなるでしょうか？最後の、完成した、罪のための供え物なのですから、その後は残されておらず、ただ神の御怒りを待つしかありません。「ヘブル 10:29-31 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。30 私たちは、「復讐はわたしのもの、わたしが報復する。」また、「主は御民をさばかれる」と言われる方を知っています。31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」赦されない罪とは、罪を全て赦す供え物を拒む罪であります。そのことに対して、主が憤りを完全に満たすということです。

## 2B モーセと子羊の歌 2-4

<sup>2</sup>私は、火が混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々が、神の豎琴を手にしてガラスの海のほとりに立っていた。

ヨハネが見ている場所は、「ガラスの海のようなもの」です。これは、神の御座の前に広がっている海のようなところ。4 章における、神の御座の幻を思い出してください。「4:6 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。そして、御座のあたり、御座の周りに、前も後ろも目で満ちた四つの生き物がいた。」私たちは黙示録を見ていると、地上でどんなに災いが下っても、また地上でどんなに悪がはびこっても、全く揺るがされることのない天の幻に戻されますね。ここもそ

うです。「ガラスの海」というのは、元々は、海というのは王座の前に広がっている部分で、その威光と力を示している部分です。そして、ガラスになっているのは、神にはしみも汚れもない方であることを示しています。けれども今、4章とここ15章の違いは、「火が混じった」ガラスの海だとしています。これは、地上に神の御怒りの火が下っているので、その火が反射されて光っているのです。

そこに、「獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々」がいます！13章、そして14章において、イエスに対する信仰を持っていた人々です。彼らはその信仰のゆえに、獣を拝むこと、その名前の刻印を押されることを拒みました。それで殺されています。13章には、「13:7 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。」とありました。地上において、獣が打ち勝っているようにされていたのですが、実は天があり、天において彼らは勝利していたのです。イエス様が言われましたね、「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」私たちは、敗けているようで勝っているのです。この世で福音のゆえにいのちを失ったら、むしろそれを救うのです。そして、自分が低くされ卑しめられたら、神が高くて、栄誉を与えられます。

そして、彼らが「神の豎琴を手にして」います。黙示録5章において、四つの生き物と二十四人の長老が、「5:8 …子羊の前にひれ伏した。彼らはそれぞれ、豎琴と、香に満ちた金の鉢を持っていた。香は聖徒たちの祈りであった。」とあります。その御前にいる天の存在が豎琴を持っているように、今、獣の国から救い出された者たちが持っています。14章においても、十四万四千人が新しい歌をうたっている中で、天からの声は、「14:2 また、私は天からの声を聞いた。それは大水のとどろきのように、激しい雷鳴のようでもあった。しかも、私が聞いたその声は、豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のようであった。」ともあります。ダビデは立琴を奏でて主に歌い、また神殿において立琴を奏でる者たちを奉仕に着かせました(例:1歴代25:1)。詩篇には、数多くの立琴による賛美を記しています。「144:9 神よあなたに私は新しい歌を歌い十弦の琴に合わせてほめ歌を歌います。」それは、天における奏樂を表しているからです。

そして、「ガラスの海のほとりに立っていた」と言っています。なぜ海のほとりなのか？その答えが3節に載っています。

<sup>3a</sup> 彼らは神のしもべモーセの歌と子羊の歌を歌った。

彼らは、モーセの歌を歌っていたのです。彼らが小羊の血によって贖われたのですから、子羊の歌をうたっているのですが、モーセの歌も歌っているのです。これは、出エジプト記15章から来ています。主が、イスラエルの民をエジプトから連れ出してくださいました。十の災いを主は下され

ました。そしてパロは、強制的に彼らをエジプトから出させましたが、その後で、彼らを追いかけたのです。民は紅海のほとりに宿営しました。その所に、エジプトの精鋭部隊がやって来ました。しかしモーセが杖を海に向かってあげると、東からの風が吹いて、海を分けました。そこをイスラエルの民が歩き、エジプトの戦車は追いかけていきましたが、民が全て渡り終わってそして、モーセが海に手を差し伸べます。すると、海が戻りました。そして、イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見たのです。その後、モーセとイスラエル人が歌を歌いました。「15:1-20・【主】に向かって私は歌おう。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。2【主】は私の力、また、ほめ歌。主は私の救いとなられた。この方こそ、私の神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」

つまりイスラエルが、エジプトを神が裁かれることによって救われました。紅海のほとりで、神の裁きを目の当たりにしました。同じように、今、地上において獣の国を神が裁かれているのを、これら信仰のゆえに殉教した者たちが見ています。そして、そのガラスの海のほとりで、その裁かれている姿を見ているのです。ですから、彼らは小羊によって救われているのですが、出エジプトがその救いを表しているものとして、モーセの歌も加えられているのです。

<sup>3b</sup>「主よ、全能者なる神よ。あなたのみわざは偉大で、驚くべきものです。諸国の民の王よ。あなたの道は正しく真実です。」

彼らの歌の内容ですが、初めに神の力を歌っています。「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです」とあります。詩篇には、「145:5-6 私はあなたの主権の栄光の輝きあなたの奇しいみわざを語り伝えます。人々はあなたの恐ろしいみわざの力を告げ私はあなたの偉大さを語ります。」私たちは、神の造られた天地にある力、その偉大さに圧倒されます。日本に住んでいますと、自然というのは美しいものという一種の優しさがありますが、とても陰しく、恐れさえ抱かせるものであることが分かります。15章では具体的には、主がその偉大な力をもって、獣の国に対して容赦ない裁きを加えられるところにある偉大な力ということになります。「詩篇 66:3 神に申し上げよ。「あなたのみわざはなんと恐ろしいことでしょう。偉大な御力のためにあなたの敵は御前にへつらい服します。」神はご自分の敵に対して、その偉大な御力を現すのです。」

私たちは、この世にある力にあまりにも圧倒されて押しつぶされてしまう気持ちになるかもしれませんが、主はその力よりも、はるかに圧倒的な力でそれらの敵を押しつぶしてしまわれます。この神が私たちの味方なのですね。「しかし、これらすべてにおいても、私たちが愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。(ローマ 8:37)」

そして、彼らが次にほめたたえているのは、神の道です。「あなたの道は正しく真実です。」万物の支配者であられる神、圧倒的な偉大な力を持っておられる神は、その道が正しく、真実なので

す。16 章にも、天から「あなたは正しい方です。(5 節)」「あなたのさばきは真実で正しいさばきです。(7 節)」という声があります。バビロンが滅んだ後も、天で大歓声があり、「19:1-2 ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。神のさばきは真実で正しいからである。」とあります。天において、神の裁きがことごとく正しい、真実であると彼らは歌っているのです。

私たちは、今はいろいろ不条理なことを見ます。また、理解できないことがどんどん起こります。しかし、ここで、獣によって殺された者たちが、正しい真実だと歌っているように、私たちも、正しく真実だと天において納得するのです。

例えば、私たちは福音を聞いても拒む者たちが、神に怒りの中に入ると聞いています。これだけ良いことをした人なのに、という思いが出て来るかもしれません。そして福音を聞かないままで死んでいった人々はどうなるのか？という疑問も浮かぶでしょう。しかし天に行けば、必ず、「主よ、あなたはこのように正しく真実です」と完全に納得、理解、そして賞賛できる知識をいただけるはず。ですから、チャックはよくこう言いました。「分からないことが起こったら、分かるところに引き下がろう。」今起こっていることは、分からない。けれども、主が正しく真実であることは分かっている。このことに立ち戻るのです。私たちがすでに分かっていることを、分からないことによって犠牲にすることほど、もったいないことはありません。

そして 3 節には、「諸国の民の王よ。」とあります。そうです、一部の者たちだけでなく、全ての国民が主を自分の王としてひれ伏す時が来ます。そこで次の歌になります。

<sup>4</sup> 主よ、あなたを恐れず、御名をあがめない者がいるでしょうか。あなただけが聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが 明らかにされたからです。」

すべての国々の民が来て、礼拝します。まず、「あなたを恐れず、御名をあがめない者がいるでしょうか」と言っています。すべての人にとって、あがめるべき名は一つになります。イエスの名です。この方が十字架の苦しみを味わい、それから死者の中からよみがえられたことにより、この方が主であることが明らかにされました。「ピリ 2:10-11 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」ペテロが、ユダヤ人たちの前で証言しました。「使徒 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

主のみが、「聖なる方」です。すべての人は、この方には傷や欠点がないことを認めます。どれほど優れた指導者がであろうが、そこには悪があり、汚点がありました。神のみしか義はなく、御子

キリストは、父なる神に受け入れられた正しい方です。この方には汚点がなく、聖なる方だから、すべての人たちがこの方をあがめに来るのです。その逆に、今の時代は、神を憎むように仕向けられています。それは、神が聖なる方だからです。このご性質に、人々は嫌がります。

「すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。」と歌っています。一部の民ではなく、全ての国々です。これは、聖書の初めから終わりまで一貫して強調されていること、全ての国民が主の前にひれ伏します。今、私たちは福音が世界に宣べ伝えられているのを見ます。そして最後には、国々が主イエスの前に連れてこられ、羊と山羊を選び分けるように選り分けられ、正しい者は御国に入ります。そして、事実、キリストが王となり、この方のもとに国々の民がやって来て、ひれ伏すのです。「詩篇 22:25-28 大いなる会衆の中での私の賛美はあなたからのものです。私は誓いを果たします。主を恐れる人々の前で。26 どうか貧しい人々が食べて満ち足り主を求める人々が【主】を賛美しますように。——あなたがたの心がいつまでも生きるように——27 地の果てのすべての者が思い起こし【主】に帰って来ますように。国々のあらゆる部族もあなたの御前にひれ伏しますように。28 王権は【主】のもの。主は国々を統べ治めておられます。」

今、私たちは世界中で、主イエスの御名をあがめる兄弟姉妹がいます。私たちが日本にいとく、神の国は日本人のもの、また宣教師として来ているアメリカ人や韓国人のものだけに考えてしまいます。けれども、世界のあらゆる民族と国民に広がっているのです。そして、終わりの日、キリストがエルサレムで王となられる時には、あらゆる諸国がこの方を拝みにやってくるのです。「ゼカリヤ 14:16 エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の【主】である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。」

## **2A 聖所からの御使い 5-8**

### **1B 清い光り輝く姿 5-6**

<sup>5</sup> その後、私は見た。天にある、あかしの幕屋である神殿が開かれた。<sup>6</sup> そして七人の御使いが、七つの災害を携えて神殿から出て来た。彼らは、きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。

ここは、ちょうどラツパによる七つの災害の時にも似たようなことが起こりました。「8:2-5 それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラツパが与えられた。3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。5 それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声かとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。」第七のラツパが吹き鳴らされて、それで七人の御使いが同じように立っています。地上にある幕屋や神殿は、天にある実体の模型であり、影であること

を、私たちはヘブル書から知っていますし、この 8 章の学びの時に学びました。ただここでは違う点があります。第七の封印が解かれた時、これらの御使いは御座の前に立っているだけです。

けれども、この第七のラツパが吹き鳴らされた後に、七人の御使いは聖所そのものから出てきています。11 章の最後には、契約の箱が見えるほどですから、至聖所のところから出てきているような形になっています。主の聖なるご臨在と栄光から、直接、これらの災いが下るのです。

そして、「きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。」とあります。まるでイエス様ご自身であるかのような輝きです。ヨハネが、イエス様にあつた時の、この方の姿を思い出してください。「1:13 また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。」神のすぐそばにいたために、主の栄光と聖さ、その力が反映して輝いているのです。亜麻布は、祭司の装束、神と人との仲介者としての働きを示しています。金の帯は、キリストの栄光を持つ使者としての働きを示しています。

## 2B 栄光の煙 7-8

<sup>7</sup> また、四つの生き物の一つが、七人の御使いたちに七つの金の鉢を渡したが、それには世々限りなく生きておられる神の憤りが満ちていた。

神の御座のところには、四つの生き物がいます。その一つから、金の鉢を受け取ります。それは先の 8 章と同じく、香を焚くところの金の鉢かもしれません。聖徒の祈りがその煙の中に現れていることが、5 章に書かれていました。そして、それは、「世々限りなく生きておられる神の憤り」であるとあります。神の御怒り、しかも永遠に生きておられる神の御怒りです。既に 14 章でそれがどういふことなのかを読みました。「14:10-11 その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。獣とその像を拝む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない。」

<sup>8</sup> 神殿は、神の栄光とその御力から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその神殿に入ることができなかった。

聖所が煙で満たされているということですが、それは神の栄光と大能のゆえであるとあります。地上の幕屋でこのことが起こりましたね。民が荒野で幕屋の用具を造りました。最後に、モーセが組み立てました。「出エジプト 40:34-35 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」そしてソロモンが神殿を建てた時も同じです。「1列王 8:10-11 祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が【主】の宮に満ちた。祭司たちは、その雲のために、立って

仕えることができなかった。【主】の栄光が【主】の宮に満ちたからである。」主の栄光を前にしては、だれもそこに立ち入ることができない状態です。

つまり、16章から見る七つの災いは、神の聖さ、正しさ、栄光と力を表すものだということです。それは単に苦痛を表すものではなく、私たちはただ神を恐れかしこみ、この方のさばきに触れ伏すような、そこには聖さ、正しさがあります。私たちの生きている世は、人間の正しさが、自分の正しさが主張されているところです。しかし、主を恐れかしこみながら、正しく歩むことを覚えたいものです。「1ペテロ 1:17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごさない。」